

"PIED PIPER DAYS" DAVID CASSIDY *at Paper Sleeve Collection*  
HOME IS WHERE THE HEART IS ... / DAVID CASSIDY

青春の館 | デヴィッド・キャシディ

- ① **ON FIRE** (David Cassidy/Bill House)  
ほくは燃えている 2:38
- ② **DAMNED IF THIS AIN'T LOVE** (David Cassidy)  
これが恋でなかったら 3:24
- ③ **JANUARY** (David Paton)  
ジャニユアリー 2:57
- ④ **A FOOL IN LOVE** (David Cassidy/Bill House)  
フール・イン・ラブ 2:49
- ⑤ **TOMORROW** (Paul McCartney/Linda McCartney)  
トゥモロー 4:42
- ⑥ **BREAKIN' DOWN AGAIN** (David Cassidy/Bill House)  
青春は悲しみ 3:44
- ⑦ **RUN AND HIDE** (David Cassidy/Bill House)  
恋のかくれんぼ 2:21
- ⑧ **TAKE THIS HEART** (David Cassidy/Gerry Beckley)  
心のさびしさ 3:27
- ⑨ **GOODBYE BLUES** (Ronnie S. Wilkins)  
グッバイ・ブルース 2:16
- ⑩ **BEDTIME** (David Cassidy/Gerry Beckley/Ricky Fataar)  
ベッドタイム 2:45

ORIGINAL RELEASE: 1976 / RCA APL1-1309

PRODUCED BY DAVID CASSIDY & BRUCE JOHNSTON  
ENGINEERED BY RICHIE SCHMITT

ART DIRECTION & DESIGN: GARY BURDEN  
FOR GARY BURDEN FOR R. TWERK  
PHOTOGRAPHY: HENRY DILTZ  
TITLES & CREDITS LETTERING: HENRY DILTZ  
FRONT COVER CALLIGRAPHY: PAUL RUSCHA  
ALL OTHER LETTERING: DAVID CASSIDY  
SETTING & COSTUMES: KARL HOLM & PALEEZE

REISSUE PRODUCED BY YOSHI NAGATO  
FOR BELIEVE IN MAGIC INC.  
PRODUCT MANAGER: SHIGERU SEKIGUCHI (BMG JAPAN, INC.)  
MASTERED BY KOZU TANAKA AT JVC MASTERING CENTER

BOOKLET DESIGN: BELIEVE IN MAGIC INC.



## ON FIRE

僕はものすごく自己中心的な気持ちになって、手近にあったアコースティック・ギターを片っ端から弾いて、えーと、リード・ヴォーカルも取った。ビルがギンギンの演奏をして、静かに何度も微笑んでいた。ブライアンがベースをブンブン弾いて、リッキーとキング・エリソンがドラムとコンガをそれぞれ叩いた。ジョン・ホップスがいつものように素敵なヴィブラフォンを奏で、当日、電子ピアノもライブ演奏した。ジミー・サイターは一心不乱にタンバリンを鳴らし続けた。実はこの曲は、ある夜、ヒーターの冷気に包まれてビリビリしながら、友人スティーヴに少しばかり助けってもらって書いた物だ。約40分で仕上げたんだ。その後で彼は、うっかり、あるいは意図的にかもしれないけど、僕が徐々に聴いたと思えるような熱いリード・ソコを灰にしてしまった。とはいえ、僕はもうああいうのはあまり聴かないんだけどね。ある晩、スタジオに行った時に、ヴァース部分の歌詞を除いて全部というか、まあとにかく曲の大部分を僕はビルの前で演奏してみせて、それからテリーの事務所へこっそり行って、一緒に10分でサツとまとめたんだ。すべてが出来上がってからポップ・アルシヴァーに電話して、単に色彩を埋めるためではなくちゃんと楽器としてストリングスを用いられるような、素敵な楽譜を書いてくれるように頼んだ。プリッジ部は激しく燃え上がるべきだと僕は思っていたからね。聴けばお分かりいただける通り、彼は快く同意して、ほとんどのアレンジャーがこれまで使ったことすらないような感じのストリングス・パートを書いてくれた。そうして完成した物を僕は大いに気に入ったんだけど、ビルは混乱していた。最初に演奏して聴かせた時、彼はそれほど心を動かされていなかったからね。でも今では最高の共作曲だと二人とも思ってるし、僕個人の作品としても間違いなくベストに入ると思う。僕って実に謙虚だね——ふふふ。

## DAMNED IF THIS AIN'T LOVE

この曲は結構前から頭の中にあっただけど、ある晩、ピック・アップトラックの荷台で凍えていた時になってようやく仕

げることができた。で、僕はリード・ヴォーカルを取って、友人であるジェリー・ベックリーやデューイ・パナルと一緒にバックアップ・ヴォーカルも歌った。前の曲（「ほくは燃えている」）でも一緒に歌ってたんだけど、名前を出すのを忘れてた。ごめんよ。僕はアコギとエレキも演奏して、リッキーが兎事なドラムを叩いている。指が動く限りの速さでビル・ハウスがエレキ・ギターのソコを弾き、ブルースが電子ピアノを弾いた。確か、パーカッションのトラックもあつたはずだ。記憶を頼りにこれを書いてるんだけど、叩いたのは僕かジミー・サイターだったと思う。あ、そうそう、ハリー・ロビンソンもやって来て、ハンジョーをオーヴァードブしたんだ。ブライアンが辛口でおいしいベースを弾いて、スティーヴは家に帰って寝た。僕もそうすべきだったと思う夜が何度もあつた。

## JANUARY

ジェリーがイングランド（彼が住んでいる場所だ）から戻ってきた時にこのレコードを聴かせてくれたんだけど、みんなあまりにも気に入ったもんだから、最初の晩だけで30~40回は聴いたと思う。その後すぐにレコードは盗まれたかどこかに置き忘れたかして、二度と見つからなかった……。3、4ヶ月経ったある晩、僕はスタジオからジェリーに電話をかけて、この歌を覚えてるかどうかが聞いてみた。僕自身はリード・ギターとコーラス・パート以外、何も覚えていなかったからね。何とかなると思うよって彼が答えて、30分後、記憶を頼りに全体をつなぎ合わせるべく、二人で取り組んでみた。結果は、まあまあというか、少なくとも近い感じにはできたと思う。その晩僕らが思い出すことのできた歌詞は半分くらいだったんだけど、イングランドから「特別便」でレコードを新たに送ってもらうまで、その歌詞で間に合わせるようになった。その晩僕が思い出したリード・パートをスティーヴが演奏し、それをこまかすため、ビルがリズム・ギターを弾いた。きつまた伝染病に感染したんだと思うんだけど、とにかくリッキーが急病になって、ゲイリー・マラーが十分すぎる代役を果たし、素晴らしい演奏をしてくれた。ベースのパート